

華文放送活動を開始

華文部長 大平安、孝

放送開始まで

華文放送は同盟年來の懸案であつた。私が中國にゐた頃「同盟は英文や佛文の放送をしてゐながら世界人口中もつと多い中國人に呼びかける華文放送をやらざるゝのは怪しからぬ」といふ抗議を聞いた。同盟の中國關係者、俗にいふ「支那屋」の間では華文放送の實施は是非やらねばならぬといふ意見であつたが、無電施設がなかつたため延引され、その實現をみるにいたらなかつた。

しかるに昨年十月の支社局長會議においてこれが具體化につき是の決定をみた。即ち同會議に當り佐々木北支、松方中支、横田南支の三總局長の提議にもつき、「逋信省を督勵して無電室を急設せしめ、華文放送を至急開始せられたし」

との決議をなし、一方放送に關する具體案および人材は北支、中支で心配するといふ決定をなすにいたつた。かくて松方中支總局長と佐々木北支總局長との間で人選を進めてみた。そのうちに大東亞戰爭の勃發となり、華文放送の必要はますます痛感されるにいたつた。こゝにおいて逋信省もいよいよ無電室を都合するといふことになり懸案の華文放送は漸く本格的軌道に乗つたのである。

三月下旬にはスタッフの人選も終り、中支組七名は四月十三日東京着、北支組十名は二十日に東京に到着した。そして中野區に設けられた同盟華人寮に合宿、職制も決定し、二十七日よりテストを開

始し、五月一日より一日九時間九千語の放送を行つてゐる。

放送開始早々汪主席はじめ各方面より感謝激勵を受けてゐる。また受信してゐる滿洲國々通、北支の中華通電、中支の中央電訊、南支同盟各支局、サイゴン、バンコック、パタヤ、マニラ、昭南島その他からいづれも好成績の旨電報があつた。華文部長一同はこの新しき事業に關し責任の重大なるを痛感してゐるが、華人記者諸君の張り切り方といふものは涙が出る程で、日華親善の實は同盟によつてもつとも力強く實踐されつゝあるのである。

華文部の陣容

華文放送の陣容は小生が華文部長（總編輯）中央電訊社に出向してゐた大星石松君、東亞部の長老平田泰吉君の兩君が華文主任、北支から來られた楊士焯君、中支から來られた關竹郎君が副主任、翻譯兼記者として北支より宋少白、宋乃吉、馬家鼎、中支より許毓彬、林春暉、火一羊、厲聲清の七君、譯電（註）これは日本にはない仕事で華文を電報文の數字符號に改めたり數字電文を華文に反譯するもの）北支より郭紹鏞、趙通璧、蔣志清、宋玉琛、中支より馮學農、王語先の六君、無電技師として安長祐、楊士榮の二君、この内地人三名、華人十七名、計二十名が華文部の全陣容である。

こゝで一寸華文部首腦の人物紹介をしておきたい。先づ部長の小生は只看板だから省略し、主任の大星石松君は外語支那語

科出身、入社以來天津、北京、新京、奉天、上海、南京と十年餘りのうち半年程本社勤務をしたのみで中國各地を飛び廻つた。中央電訊社の前身、中華聯合時代は片田舎まで出かけて支局を作つたりしたもので中國語は頗る堪能である。同盟中國語學者としては佐々木北支總局長、横田南支總局長を別とすれば川崎、西里、長谷川などといふことになるのではないかとはいはれてゐる。南京での評判では日本人の中國語の大家は清水（大使館）佐々木（北支總局長）の兩君に次いで大星君だといふことであつた。そこまではどうか、返に再

中國語の大家であり、且つ中國をもつとも理解してゐる大星君を中心に華文部が活躍をつづけてゐるわけである。

△主任の平田泰吉君は古野社長が先頃まで東亞部にあつて活躍、中國語を話す方はそれ程でもないが中國人および中國を理解することは非常なものである。同君はまた中國の輿論としても有名だ。しかしその博識を銜ふやうな態度は絶對にない。北京では車夫までが「平田先生」(ピンテンションセン)の徳に懐いてゐたことによつてもその人柄のほどが窺知されるであらう。

△副主任楊士焯君は北京中國大學出身の秀才で事變前天津にあつた大公報の記者として活躍、華文部に來られるまでは中華通電社の採訪主任（外勤主任）たり、北京新聞界の重鎮で、文章をよくし、日本に對する理解深く、日華親善のために盡力してゐる。

△副主任關竹郎君は楊君と同様北京中國大學出身の秀才で、青島新民報の記者であつたが、和平建國の精神に共鳴、汪精衛氏の下に馳せ參じ、中央通電社の副總編輯

（編輯局長）であつたのを林柏生社長が同盟のために割愛されたのである。

他の諸君もそれぞれ前途有爲の青年記者、技師であり、大東亞建設の同志である。同盟だからこそ、華文放送の有意義を認められたればこそ、これだけの人材をあつめ得たのである。

華文放送の使命

帝國は日滿華一體となつて東亞全土より米英の勢力を一掃し、東亞人の東亞、即ち大東亞共榮圏の確立を基調とし世界平和のために世界の新秩序確立のために邁進してゐるのである。東亞人の東亞建設には孫文先生の遺訓を引用するまでもなく、中國人の絕對協力が當然要求される。

東亞における華語使用の人口は左のごとくである。（單位千人）

滿洲國	100,000
中華民國	200,000
佛印	300,000
泰	1,500,000
香港	1,000,000
馬來	5,000,000
比島	2,000,000
ボルネオ(舊英領)	5,500,000
東インド	10,000,000

右のごとく現下の華語使用人口は約五億に達し、世界人口二十億のうち、實にその四分の一を占めてゐる。英語國民二億二千五百萬などに比較すると格段の相違である。華文放送は實にこの五億の華語大衆を相手に呼びかけんとするものである。それだけに放送内容においても使命は重大である。華文放送によつてどんな仕事を

本と協力しつゝある滿華兩國國民、その他抗戰建國の名に迷はされ、米英の犠牲となつて未だ覺醒の折を知らざる重慶治下にある中國人も含む華語國民一般に對し、これらの大衆をもつとも親しみ易き華文華語によつて呼びかける。しかして各地に散在する華僑の動靜を報じ、偽りなき世界の動きを知らしめ、大東亞戰の眞實の姿、歐州戰の正しき情報等を傳へる。また日本が何故に大東亞人の東亞建設を強調するか、東亞共榮圏を建設するには如何になすべきか、その抱負を説明し、經驗を明示する

かくて東亞民族の協力を堅固にし迷妄頑固の重慶側一派の啓蒙醒醒を促し、兄弟鬩牆の愚を揚棄して東亞の樂土招來を促進すべく、報道報國の重任に挺身せんとするものである。

日華親善は同盟から

華文放送の使命はかくのごとく

全九州各支社局
同報 打合會議
無電

全九州同報無電打合會議は福岡支社主催のもとに四月十五日午前九時から福岡市ホテル清流荘で開催した。出席者は本省、熊本逋信局ならびに同盟各支社局所屬同報係支社長全部で、麻生福岡支社長の開會の辭によつて山口地方部長から同盟側を代表し、挨拶を兼ねて同報無電の現状報告をなし、逋信當局側から安西東京逋信局長、原同盟分局長、武富能達局長、原同報局長、杉山檢見川局技師各局部を代表し挨拶をかねて所管事務の説明をなし、續いて各支社局長の現状報告、希望の開陳があつて休憩。

重大である。華文部のスタッフは幸に最優秀クラスを與へられたが、社會體の協力なくしては充分の働きをなすことが出来ない。本社取材關係の方はもちろん、同盟全體がこの事業に理解を持つてあらゆる協力を惜しまず、進んで援助して貰ひたい。

さらにお願ひしたいのは日華親善の實は兩國國民の間に互に理解を持つことであるとの見地から華文部に來られた中國人諸君によき印象を與へるやうに努めて貰ひたいといふ點である。今回日本に來られた諸君は二、三年在京された後後任の人々と交代し、歸國の上各地の新開通通信の中心人物となつて勵まれる人々である。この人達に日本の正しき姿をよく見せ、よく理解し、誤りなき日本を傳へられるやうにしたいと考へるのである

日華親善の實はわれわれ同盟を通じて實踐して行くといふ考へで行たきたいと思ふ。

午後の會議は一時半開會、未濟支社局長の報告あり、麻生支社長司會のもとに逋信局で集めた受信者側の提案事項二十四項目について審議が行はれたが無電の運用成續如何は同盟の業績に直接關連を有する重要問題であり、逋信當局にも重大な役割を遂げてゐる無電の能率昂揚上極めて意義深い會議であることを理解し、且つ參加者一同同報無電開設以來のこの種の會議開催を切望してゐたのが漸く實現したことに極めてなごやかな空氣の裡に熱心な討議が續けられた。なほ六時同ホテル大ホールにおける同盟招待の晩餐會に臨んだ。かくて全國で最初の同報無電に關する會合は有意義に且つ多大の收穫を收めて終了した。

社員 鍊成 譜

美吉野 鍊成大會

大阪支社第二回社員大運動會は京都支局と合同のもとに四月三日櫻と史蹟の吉野で舉行された。全員三百名の一行は快晴に恵まれたこの日關急電車で吉野川清流に望む美吉野運動場に至り國民儀禮のち、全員のラジオ體操にまづ集團鍊成の實をせしめ、敢闘多彩を極めた競技の幕を切つて落

高松 石清尾山ハイキング

春光さんくんとそとく新開公休日、高松支局員は打揃つて石清尾山コースへハイイクした。先づ麓の縣社石清尾八幡神社に參拜皇軍の武運長久祈願の後コースを

社長訓示

二我々の職分

編輯局に席をおかれる諸君は全國民の民心の動向、人心の方向等を察知してこれを中央のそれの政府機關によく熟知せしむると同時に、また前線將兵の活動の情況を一刻も早く傳へると同時に、さらに世界各國の動向を瞬時も遅滞なく日本國民に傳へなければならぬ。また通信局の諸君は中央と地方の、國內と國外との連絡を保つために間斷なく努力をしなければならぬ。通信局の擔當してゐる任務はこ

澤

東尋坊探勝

金澤支局では四月三日男女全員十六名福井縣東尋坊探勝へ行つた。早朝金澤驛を出發した一行は車窓の春風も快く三國港に到着、約二キロの海岸の道を歩いて十時過ぎ東尋坊にたどりつた。岩々々の絶景、奇勝に眼をみはりながら、また十数丈の直下で咆哮する怒濤の叫びをききながら、持參の辨當を開く。岩傳ひに貝拾ひや雲丹採取に興ずるあり、怪岩の山路にかゝる。

小 戰勝祈願と 雪中行進

四月三日神武天皇祭、今年もこの佳き日を雪の中で迎えた北海道ではまだ「春とはいへど肌寒し」といふところ、小樽支局では本社に差したしたが、この祝祭日を意義あらしめるため午前九時全員縣社住吉神社に參拜「大東亞戰爭完遂必勝祈願、皇軍將兵ならびに前線從軍同志の武運長久」を祈願した。次いで一同列を整へ市中を行進して脚の鍊成をなした午後〇〇で「物資節約徹底と能率増進策および社員を送迎を兼ねて」常會開催、一同社運發展に一致となつて邁進の決意を新にした

大詔奉戴日 編輯局に席をおかれる諸君は全國民の民心の動向、人心の方向等を察知してこれを中央のそれの政府機關によく熟知せしむると同時に、また前線將兵の活動の情況を一刻も早く傳へると同時に、さらに世界各國の動向を瞬時も遅滞なく日本國民に傳へなければならぬ。また通信局の諸君は中央と地方の、國內と國外との連絡を保つために間斷なく努力をしなければならぬ。通信局の擔當してゐる任務はこ

青島 奧武藏探勝

青島支局では四月三日男女全員十六名福井縣東尋坊探勝へ行つた。早朝青島驛を出發した一行は車窓の春風も快く三國港に到着、約二キロの海岸の道を歩いて十時過ぎ東尋坊にたどりつた。岩々々の絶景、奇勝に眼をみはりながら、また十数丈の直下で咆哮する怒濤の叫びをききながら、持參の辨當を開く。岩傳ひに貝拾ひや雲丹採取に興ずるあり、怪岩の山路にかゝる。

- 調査局、總は總務局の略 經濟局内經濟部次長兼商況主任 永松泰次郎 經濟部勤務 橋 敬夫 名古屋支社業務主任 寺田 宜敏 經濟部内經濟部主任 河野 寛治 經濟部内經濟部主任 渡邊 保司 札支局通信主任 田中 眞清 札支局通信主任 中井 伯明 名古屋支社經濟部次長 中井 伯明 編輯局整理部長兼査問主任 名古屋支社長 潮海秀之助 編輯局長 大平 安孝 通信局華文部編輯主任 大星 石松 通信局華文部編輯主任 關 竹 楊 士 輝 通信局華文部編輯主任 西(各通) 調査局調査部長 西(各通) 調査局調査部長不在中 部長代理 名古屋支社通信部長 兼井宗次郎 名古屋支社不在中 支社長代理 名古屋支社長 松岡伊一郎(編) 後藤國雄(通) 城間得榮(編) 中村滋雄(經) 西井武好(大阪) 刀根次平(福岡) 古屋太郎(福岡) 山下松之助(京都) 吉田秀夫(臺北) 岡本徳次(通) 曾我晴行(通) 三藤正直(編) (中央電訊社出向) 關竹郎(編) (中華電訊社出向) 楊十焯(同) 吉野 利男(通) 大森知之(通) 立石金滿(同) 京藤讓治(同) 鈴木富次(同) 中會根由紀(同) 志村富子(同) 西井愛子(同) 磯部亮平(大阪) 本田忠尚(大阪) 坂井義房(札幌) 曾我部元齋(札幌) 猪坂正春(奉天) 後藤 勇(奉天) 杉浦史忠雄(名古屋) 高橋定(北支) 北村武四郎(北支) (以下次頁へ續く)

人事 (前頁より)

國內

△社員使用ヲ命ス(以下各通)
 荒川利男(編) 井上信一(通)
 武田桃子(通) 坪田福男(大阪)
 奥山清一(通) 宮脇幸三郎(通)
 島本賢一(編) 井上次郎(福岡)
 木原健男(編) 柴 晋(京都)
 吉村 孝(編) 青嶋大藏(京都)
 南 典人(福岡) 林 尚久(通)
 根木村一夫(大阪) 小山房三(通)
 橋本國春(中支) 東島ミドリ(中支)
 安田徳助(編) 熊谷 實(北支)
 岡崎一吉(北支)

△准社員ヲ命ス(以下各通)

手塚君子(編) 中野徳治郎(福岡)
 赤瀬久江(福岡) 根本一夫(東北)
 三木嘉隆(東北) 榊榮一(通)
 加藤良助(通) 植木千枝子(同)
 熊川カズエ(京城) 吉崎梅子(京城)
 不老正恵(北支)

△准社員試用ヲ命ス(以下各通)

阿部 和(盛岡) 迎川哲治(通)
 須藤正治(通) 堀江 昭(同)
 酒井茂子(長野) 堀江八重子(總)
 佐藤正雄(經) 高橋 宏(總)
 白砂 勉(經) 松井敏子(通)
 渡邊一功(編) 平岡修子(福岡)

職制一部變更

華文放送開始および通信局に技術研究所を新設したため職制の一部を左の通り改訂された。
 第十二條 通信局ハ左ノ事務ヲ掌ル

- 一、「ニュース」ノ送受信
- 二、内外ニ對スル放送「ニュース」ノ編輯
- 三、英文通信ノ編輯
- 四、本社ニ於ケル通信ノ印刷及配達
- 五、航空ニ關スル事務

△庶務ヲ囑託ス(以下各通)

松井 亮治(通)
 狩野泰太郎(總)
 尾崎普三郎(同)
 小川 七郎(同)
 宮道 光夫(同)
 小坂橋義胤(通)

△中央電訊出向

許 毓彬(同)
 火 一 羊(同)
 林 春 清(同)
 厲 澤 清(同)
 馮 學 農(同)
 王 語 先(同)
 宋 少 白(同)
 宋 乃 吉(同)
 馮 家 驊(同)
 郭 紹 農(同)
 趙 連 清(同)
 蔣 志 濤(同)
 宋 玉 琛(同)
 安 長 佑(同)
 楊 士 榮(同)

海外より

モスクワ支局長 久我 豊雄
 編 輯 〃
 海 外 〃
 モスクワ支局長 坂田 二郎
 モスクワ支局長 長 〃
 大 陸 〃
 通信局長兼調査局情報部長 岩本 清
 中支總局長 〃

中支へ 井下 樽(通)
 北支へ 庄次みつゑ(香古屋)
 同 稻村多美子(大阪)
 同 菅生 富江(同)
 同 松井善四郎(編)
 南支へ(臨時在勤) 松井善四郎(編)
 中支へ(臨時在勤) 西村 行男(同)

大陸より

中支總局長兼南京支局長 松方義三郎
 總務局參事 藤井信次郎
 中支總務局寫眞部長 藤井信次郎
 編輯局長 藤井信次郎
 中支總局寫眞部技術主任 藤井信次郎
 編輯 〃
 三枝 政則(北支)
 寺田 榮色(南支)
 高 雄 辰馬(編)
 本社へ歸還ヲ命ス 武田 明(中支)
 編輯 〃

大 陸

香港支局長 中村 農夫
 香港支局長 小 椋 廣勝
 香港支局長事務取扱 千葉 光壽
 北支總局勤務 千葉 光壽
 天津支局長事務主任 稻津巳喜三
 中支總局勤務 稻津巳喜三
 中支總局寫眞主任 安井 徹
 張家口支局長事務ヲ囑託ス 安井 徹
 南支總局長 横田 實
 香港支局長兼務 小 椋 廣勝
 香港支局長事務取扱 小 椋 廣勝

南 方

編輯局勤務(河内支局臨時在勤) 前田 雄二
 河内支局長 前田 雄二
 西貢支局長兼河内支局長 福田 一
 河内支局長兼務ヲ解ク 福田 一
 編輯局寫眞部長 牛 勝 五郎
 編輯局勤務(部長待遇) 牛 勝 五郎
 西貢支局臨時在勤 吉田 松治
 通信局電務部長 吉田 松治
 南方各地ニ出張ヲ命ス 吉田 松治

西貢支局情報主任 井上 勇
 昭南島支局長 武雄(編)
 西貢へ 秋葉 武雄(編)
 マニラへ 松尾 次男(兼南)
 南方より 松尾 次男(兼南)
 昭南島支局長 飼手 譽四
 總務局勤務 飼手 譽四

休職・退社

名古屋支社長兼名古屋支社編輯部長 吉川 義章
 依願解職 吉川 義章
 廣澤由里子(大阪)
 藤井 忠次(名古屋)
 元田 初實(福岡)
 長谷川祥一(神戸)
 三藤 順記(張家口)
 奥山 雅信(甲府)
 柴田 善彌(平壤)
 山崎 悦子(通)
 多田 二郎(中支)
 下村 寛子(京都)
 新村 シヅエ(福岡)
 高山 泰子(編)
 柴田 修(大阪)
 太田登美子(經)
 後藤みゆき(神戸)
 今井 博(川崎)
 松井 亮治(通)
 荻場 哲雄(經)
 松方義三郎(總)

死 亡

(四月五日) 非 志 安(北支)
 其 他 〃
 郷田豊巳と改姓 丸山豊巳(編)
 市川大吉と改名 市川題吉(經)
 藤川律雄と改姓 仙田律雄(名古屋)

國通理事長更迭

滿洲國通信社理事長森田久、同理事升井芳平兩氏は過般退任することとなり、同理事長後任には同社通信社中支總局長松方義三郎氏が任命され、去る四月二十日正式に發令された。

互助會報告

【四月分】

△出 産
 井 納(大阪) 長女
 兒島 又喜(編) 長男
 坂田 藤助(京城) 次女
 沼田 正一(神戸) 長男
 增田 正二(京城) 同
 東野 貞雄(通信) 長女
 坂口 清一(編) 長女
 西川 恒喜(編) 長女
 岡田 正雄(札幌) 同
 沼邊 武(調査) 次女
 長與 道夫(編) 第一子
 松岡伊一郎(同) 長男
 櫻 鐵三郎(金澤) 四男
 大森 勳(關門) 長女
 内海朝太郎(調査) 同
 五十嵐智雄(横濱) 次男
 小林 啓二(同) 次女(二月)
 水谷 啓二(同) 長男(二月)
 福澤 延一(同) 同(二月)
 大石 石松(同) 長子
 平山 登(同) 長男(二月)
 田島 義雄(北支) 次女(二月)

△結 婚

河野 晴美 神戸
 田中 晴美 京都
 清澤 止次 關門
 茨木 定徳 大阪
 渡邊 秀雄 通信
 高松 義一 札幌
 佐邊 高雄 旭川
 大 邊 正巳 横濱
 丸山 信也 編
 圓山 建次郎 編

△廣 告・入 籍

赤 崎 和 總務
 古川 永太郎 名古屋
 淺野 實美 大阪
 湯田 保司 函館
 阿部 光郎 北支(二月)
 △見 舞
 岡崎 龜市 編 長男病氣
 坂本 蕪基 編 病氣

△退 社

藤井 忠次 名古屋
 岩井 鐵雄 釜山
 山崎 悦子 通信
 元田 初實 福岡
 長谷川 祥一 神戸
 今井 博 川崎
 吉川 義章 名古屋
 下林 シヅエ 京都
 柴田 善彌 平壤

△弔 慰

高村 利世 編 實父死亡
 古館 藤十郎 經濟 長男同
 藤澤 民之助 秋田 次男同
 藤田 金造 横濱 長女同
 柴田 機二 調査 貸母同
 坂田 東助 大阪 同
 矢島 修 北支 實父同(二月)